

小菅麻起子著

『中野トク小伝
寺山修司と青森・三沢』

尾崎名津子

本書は既に『寺山修司 青春書簡―恩師・中野トクへの75通―』（二女社、二〇〇五年、編著）や『初期寺山修司研究「チェホフ祭」から「空には本』（翰林書房、二〇一三年）もある著者による、三冊目の著書である。右の編著のタイトルにもあるように、中野は寺山が「先生」と呼び、高校時代からおよそ一〇年に亘り消息を伝え続けた相手だった。とはいえ、二人はもとも教員と生徒という間柄ではなく、中野の教え子が寺山を紹介したのだった。本書は二人の関係が結ばれ、成熟し、そして別れを迎えるまでを中核に据えている。その別れは、寺山にとって三沢との別れと等しいものだったことを本書から学んだ。また、寺山の短歌における「かくれんぼ」や「スキヤキ」といったモチーフに関する考察の部分は、本書が研究書であることも保

証する。

しかしながら、中野と寺山との関係だけを描き出すことが本書の目的ではない。全一二章から成るこの「小伝」は、「I 生い立ち」から「IV 母子二人の再出発——戦後の三沢」までがいわば第一部であり、寺山とのことを描いた「V 寺山修司との出会い」から「IX 不本意な再会と最後の手紙」までが第二部、「X 創作の原点「木馬のゆめ」——一九六二（昭和三七）年」から「XII 晩年」までが第三部という構成になっているものと読める。

中野トク（一九二一—一九九九）は青森県に生まれ、一九三七年から敗戦間際までを仙台で過ごした以外は、同県の三八上北地方（特に十和田、六ヶ所、三沢）で生涯を送った。戦時下に小学校の代用教員としてキャリアをスタートさせ、戦後中学校教員の資格を取得し、三沢市の中学校で定年まで勤め上げた。教員として長期欠席児童の問題に向き合うと同時に、一人で息子を育てる母として生きていくのみならず、中野は短歌を中心とした創作やエッセイの執筆も生涯続けた。本書の成果の一つは、中野の文業を明らかにし、その実作に彼女の

人生を語らせる叙述にある。先述の第三部（と私が便宜的に呼んだ部分）では、昭和四〇年代に中野らが青森県内における「子どもたちへ昔話を返して行こう運動」を担ったことが紹介されている。管見の限り、津軽では現在でもこうした活動が継続している（南部弁、津軽弁ともに昔話は「昔コ」と呼ばれている）。童話や児童文学との接続を考える契機となることや、方言の保存の観点から、現代における民話を語る活動の重要性はここであらためて言うまでもないが、中野の晩年の活動はその先駆けだったのではないか。

この評伝は、著者の三沢市を中心とした実地調査なしには成立し得なかつただろう。『デリーー東北』、『北斗新報』、『週刊みさわ』といった地方紙誌や、地方出版による図書、県の報告書などを丹念にたどりつづまとめてゆく筆致は、抑制が効いている。調査と言っても、いわゆる文献調査や関係者への聞き取りをまとめた報告書とは相当に趣が異なる。中野トク本人や息子の直樹氏とその家族、さらに、中野や寺山を知っていた人びととの信頼関係があったからこそ描き出せた「中野トク伝」である。

それは既に「調査」の範疇を超えている。

「小伝」と付されてはいるが、これは全くもって容易な仕事ではない。「あとがき」に登場する中野トクのご遺族の言葉のとおり、「小菅さんのライフワーク」である。

(二〇二二年四月 幻戯書房 四六上製版
一六一頁 本体二二〇〇円)